

道徳教育と社会を結ぶものとしての「宗教心」

——自由学園における実践と羽仁もと子の教育思想に着目して——

相 田 ま り

はじめに

本稿の目的

本稿は、自由学園における実践と羽仁もと子(1873-1957)の教育思想を検討することによって、社会と結び付いた道徳教育を実現するための方法と課題を明らかにすることを目的とする。

2015年の教科化決定以降、道徳教育は今日の学校教育における重要な課題の一つとなっている。教科化の決定に際しては、従来の形骸化した道徳教育への反省から、「考え、議論する道徳」へと転換することが目指されている。そこでは、問題解決的な学習や体験的な学習などアクティブ・ラーニングの視点から指導方法を改善し、子どもたちが主体的かつ対話的に学ぶことができるよう配慮することが求められている。

こうした流れの中で、日本の道徳教育研究の第一人者である貝塚茂樹は、社会と結び付いた道徳教育を実現することの必要性を主張している。貝塚によれば、戦後日本では、戦前の修身科教育への反省から「道徳教育は、政治的なイデオロギー対立の中で論じられることが主となり、『道徳』『道徳教育』という言葉さえもが、ある種の『タブー』として忌避される傾向があった」。しかし、道徳とは本来「他者とのつながりや共感を直接に問題とするものであり、同時に『他者』とつながるための知恵であり方法」である。現代社会においては、「多元的な価値観を前提とした社会を生きる子供たちのために、どのような資質・能力を育成するかは、教育が対峙すべき喫緊の課題である」¹⁾。

以上の課題に対して、本稿は大正新教育から生まれた新学校の一つである自由学園の実践に着目する。なぜなら、生徒がみずから考え、対話をしながら、そして実際の社会ともかわりながらともに生

活を営むことを、自由学園は独自の道徳教育の実践として行っていたからである。

自由学園は、1921(大正10)年、羽仁もと子(以下、もと子)とその夫・吉一によって創立された。自由学園はキリスト教の精神に基づく自由教育を行う学校として、また、生徒たちの手による昼食づくりなど生活教育を行う学校として知られるが、宗教(キリスト教)に支えられた自由と実際の生活とが結び付いて語られるところに、もと子の思想の特徴がある。創立に当たって、もと子は「我々の実際生活と没交渉な教育法」を改めて「もっと実力のつくような役に立つ人間になるような勉強をさせ」たいとする一方で、倫理や宗教の問題について学ぶことを通して「子供たちめいめいの心々に自由な健全な宗教心の素地を養い成して行きたい」と述べている²⁾。また道徳教育に関しては、「学校の中もまた一つの社会なので、子供たちにこの自覚を確かにさせ、またよい社会を、自分の力でつくるように、教え導いてゆかなくてはなりません。そうしてそれがまた、私たちの対社会の教育、および社会道徳の訓練になります」³⁾として、自由学園での生活そのものが道徳教育になると述べている。生活そのものとしての道徳教育とは、具体的にどのようなものなのか。もと子の目指す社会とはどのようなもので、それは道徳教育とどのように関係しているのか。これらの問いを追究することによって、社会と結び付いた道徳教育を実現するための方法と課題を提示したい。

大正期の道徳教育と先行研究の状況

大正期、一般的な学校では国定の修身教科書が使用され、明治期以来の教育勅語体制に基づく国民道徳が教えられていた。先ほどの貝塚によれば、当初その評価と解釈が一定しなかった教育勅語は、日露戦争後になるとその正当性が自明のものとなされ、修

身科を中心とする学校教育を通じて徐々に浸透していった⁴⁾。

その一方で、一部の私立学校や師範学校などでは新しい教育を模索する動きが生まれた。大正新教育と呼ばれる一連の教育改革運動の担い手たちは、従来の硬直した学校教育を批判し、子どもの個性や自発性を尊重した学びのあり方を追求した。様々な取り組みの中には、澤柳政太郎による子どもの発達段階を重視した修身教授改革論や及川平治の「為すことによって学ぶ」修身科の授業など、子どもの主体的な学びを重視した道德教育（当時の修身教育）の理論や実践も含まれていた⁵⁾。しかし、1924年に起った「川井訓導事件」以降、これらの自由主義的な教育は退潮し、その後へと続く軍国主義の流れに呑み込まれていったとされる⁶⁾。

こうした状況の中で、自由学園の実践は次の二つの点で注目される。一つは、国定教科書を用いた修身科の授業を行わず、生活そのものを学びの題材としていた点である。言い換えれば、単なる教授法の改良ではなく、教育のあり方、学びのあり方を根本から変えようとしていたことである。もう一つは、創立者であるもと子のキリスト教思想に基づいて教育が行われていた点である。キリスト教思想に基づくといっても、自由学園はクリスチャンを育てるための学校ではない。もと子の意図は、各人が自己の生活を営みつつ、他者とともに社会を進歩させていくことのできる人間を育てることにあった。これは、現代の「考え、議論する道德」や教育全体で育てることが求められている人間像と大きく重なるものであるだろう。

自由学園に関する先行研究として、ここでは自由学園草創期におけるキリスト教の問題を扱った村上民の一連の研究を取り上げたい。村上はこれらの研究において、もと子と吉一が結婚以前にそれぞれキリスト教と出会い、特に吉一がキリスト教社会主義に深く共鳴していたこと⁷⁾、二人が共同で立ち上げた婦人友社や自由学園での取り組みの背景には、二人の信仰とキリスト教思想に基づく社会事業という意味が込められていたことを明らかにしている⁸⁾。また、もと子が宗教の詰め込みを危険視し、直接的なキリスト教教育を行うことには慎重であったことを指摘し、当時の宗教教育の実践内容にも言及している⁹⁾。これらの研究は本稿の視点とも重なり興味深いが、実践については内容が提示されるにとどま

り、それらの実践がもと子の思想とどのように関連していたのかを具体的に検討するまでには至っていない。

研究方法と本稿の構成

以上のことから、本稿は自由学園における創立から1931年頃までの道德教育の実践と背景にあるもと子の思想について検討する。このように時期を区切るのは、この時期の実践にもと子の理想とする教育のあり方がもっともよく表れており、また、様々な試行錯誤を経て自由学園の教育のあり方が確立され、その立場が明確にされた¹⁰⁾のが創立10周年（1931年）を迎えた頃だからである。史料としては、当時の実践をまとめた記録（『自由学園の歴史Ⅰ』など）や、『婦人友社』や『羽仁もと子著作集』に収録されたもと子の論文などを用いる。

なお、本稿は以下の手順で検討を進める。はじめに、もと子が自由学園の「生きた修身科」と呼んだ「懇談」と「読書」を中心に、自由学園の道德教育の実践内容を明らかにする（第一節）。続いて、もと子がこれらの実践の先に想定していた社会像について考察する（第二節）。最後に、もと子が自由学園の教育によって育むことを目指した「宗教心」と、道德教育や自由学園の目指す社会との関係について検討する（第三節）。

1. 自由学園における道德教育の実践

本節では、自由学園の道德教育の実践内容をみていく。その際、もと子が自由学園の「生きた修身科」と呼んだ「懇談」と「読書」のほかに、前者に関連するものとして、自由学園の「家族」と「実際科」、学生委員会についても取り上げる。

1-1. 「家族」と「実際科」

自由学園は、先述したように、昼食づくりなど生徒たちがみずからの手で生活を営むことをその特色としている。衣食住すべての生活に関することを生徒たち自身が行う生活は、「自労自活」¹¹⁾の生活と呼ばれた。

自由学園における「自労自活」の生活は、「家族」と呼ばれる5～6人からなるグループを中心にして営まれた。創立の趣旨を述べた論文において、も

と子は自由学園の教育を「全く新しい家庭的友情的気分」の中で行いたいと述べており、教師が生徒に対して一方的に教えたり、生徒同士が成績を競ったりするような空気を排したいと考えていたことがわかる。「家族」をつくる目的については、「相互の健康にも、学問の進歩にも、気分にも気をつけ合って、共に進歩して行く」こと、「家族というものに対する義務や責任や、それによって助けられること」などを経験させたい、と述べている¹²⁾。

この「家族」は少人数のグループであったが、単に親しくなることを目的としたものではなく、また「家族」のために個人を犠牲にすることを求めるものでもなかった。もと子は「家族」をつくるに当たって、「気の合わない人とも、どうしたら互に自己を没却することなしに親しんで行かれるかを学」んで欲しいと述べており、実際に「家族」のメンバーは半年ごとに入れ替えられた。また、「一人一人の自分としての外に、自治的に家族的の生活を営む」というように、「家族」で協力して生活をつくり上げることは、個々人の生活を犠牲にすることによってではなく、むしろ個々人の自立した生活と両立させることが求められていた¹³⁾。

以上のような意図の下につくられた「家族」であるが、その働きがもっともよく表れているのが「実際科」と呼ばれる科目である。毎日昼前の一時間には「実際科」が置かれ、その時間には「家族」のメンバーがそれぞれ分担して、昼食の準備や衣服の整理（製作・修繕・洗濯）、飼育している鶏の世話や畑の手入れなどを行った。学校で温かい食事をとることは、もと子がかつても重視したことの一つで、もと子は「めいめいに弁当を持って来るのではなく、やはり家族らしく、交代にその家族の一人一人が炊事に当って、家族の食卓を調えることにします¹⁴⁾」と述べている。食事の当番でない「家族」の他のメンバーは、同じ時間に上に述べたような仕事を行うことになっており、実際の家族のように、それぞれが仕事を分担して皆の力で一つの生活を営むという形が採られていた。

1-2. 学生委員会と学校行事

自由学園の「自労自活」の生活を形づくっていたのは「実際科」だけではなかった。1923年に起った関東大震災での救援活動をきっかけに委員会制度がつくられ、後に学園全体の自治を取りまとめる学生

委員会として組織された。1929年の時点では三つの部が設けられ、食事部は献立の作成や食材の仕入れ、台所器具の管理などを、整理部は校舎の掃除や簡単な修繕、園庭の管理などを、経済部は消耗品や器具類の購入、学費の集金や経常費の支出管理などを担当した¹⁵⁾。

また、音楽会や美術展覧会などの学校行事の際にも準備委員会が組織された。例えば、創立10周年記念音楽会（1931年5月、日比谷公会堂）の際には17名の生徒からなる実行委員会が中心となり、会場の手配から宣伝、切符の販売、当日の会場整理まで、会の運営にかかわるすべてのことが生徒たちの手で担われた。このほか、学外の施設見学や遠足などの際にも、生徒自身が計画を立て、見学先や交通機関との交渉などを行った¹⁶⁾。

このように何でも生徒たち自身が行うことの意義を、もと子は次のように述べている。

何でも社会との交渉があるたがいに指導をして、出来るだけその実行は生徒に任せ、あとで報告をさせるというやり方をすれば、娘たちは喜び勇んで、おとなが彼らを考えているよりは意外に立派なことをするものです。そうしてこのようなことのあるたびに、教師と生徒との信頼と親しみが深くなるものです。¹⁷⁾

心配して生徒を囲い込んでしまわず、生徒を信頼して任せることが生徒自身の成長につながることを、もと子はここで述べている。もと子は上の引用に続けて、自由学園の生徒が遠足の計画を立てる際、交通手段の交渉をしに駅に行ったときのことなどを例に挙げて、「子供たちに世の中との交渉をちゃんとさせてゆく」ことの必要性を説いている。もと子によれば、大人が何でも先回りして守ったり、代わりにやってやったりするのではなく、生徒自身が試行錯誤をしながら実際の社会とかかわっていくことが「社会の一員としての教育の基礎になってゆく」。食材の調達をはじめとして、学園の日々の生活を成り立たせるためには学園の外の社会と交渉しなければならない場面が多々ある。一般的な学校ではそうしたことは教職員が行うが、それらをすべて生徒に任せてみれば、「生徒はみずから、大きな社会の中に生活している自分たちということを知って来て、自然にその覚悟と工夫と態度が出来て」いくのだと、

もと子はみずからの経験から述べている¹⁸⁾。

1-3. 「懇談」

「家族」を中心とする生活の中で生じた様々な問題を話し合う場として、もと子は週に一時間「懇談」の時間を設けた。「懇談」の時間には「家族」ごとに集まって、もと子や吉一とともに、その週の出来事や様々な問題について話し合った。

卒業生がまとめた記録の中では、次のように書かれている。

ミセス羽仁が「生きた修身科」といわれた懇談は、両先生と深く接する時間であった。一週に一度、その週の生活の中にあつたさまざまのこと、友達との交わりの中での小さいさかい、よくないことをしてしまったと気にかかること、嫌だいやと思ったこと、何でもすべて持ち出してミセス羽仁に聞いて頂くのである。まだ幼稚な子供達のごく些細な問題も丁寧に聞いて下さった後、思わぬ解決を与えて頂くと、どんなわだかまりもさらりと消えて、誰とでも仲よくしようという気になるのだった。又何でもミセス羽仁が教えて下さったことは、本当にそうだと思い、絶対を守るうと努力した。¹⁹⁾

このように、一週間の生活の中で感じたこと、考えたことを「何でもすべて」もと子に聞いてもらつたと、生徒は振り返っている。もと子は「まだ幼稚な子供達のごく些細な問題も丁寧に聞き、解決に向けてのヒントを与えたり自身の考えを示したりしたという。例えばあるときの「懇談」では、クラス内の人間関係が固定化していることが問題になった。このことに対し、もと子は「好きな人とばかり一緒にいると、互いの長所も欠点も分からなくなる。クラス全体を考える広い心を持つことも出来なくなる」、「家族」の中での「協力の経験をクラスにも学校全体にも拡げていくように」と語つたという²⁰⁾。

1-4. 「読書」

「懇談」とともにもと子が自由学園の「生きた修身科」と呼んだのが、「読書」の時間であった。この時間には、生徒たちの年齢や理解度に合わせて『小公子』や『ウィリアム・テル』、シェイクスピア

などの文学作品が読まれた²¹⁾。

もと子は「無味乾燥な修身教科書にかえるに、古来のよい文学や伝記をもってすることは、確かに有効なことだと思います²²⁾」とした上で、これらの作品を読む意図について次のように述べている。

『青い鳥』『クォーヴァジス』上の組では『人形の家』『桜の園』『街の子』『カラマゾフの兄弟』シェイクスピアのものいろいろ、ダンテの『神曲』など、各方面から、子供たちに、暗い人情と明るい人情と、浅い人心ひとごころと、深い心の懂がれとを見せてくれます。以上のように現在私たちの周囲に起こるところの事柄が、生きた修身の材料であると共に、それだけでは狭苦しいのですが、こうして一緒に本を読むと、英雄の心も大罪を犯す人の心も、三界に家なき人の境遇も王侯の生活も、子供たちの目の前に転回します。……一方にこういう時間のあることは、子供に実際生活を担当させても、いわゆる人ずれのする心配はなく、また懇談の時間に、現実的な問題を取り扱っても、愛の空気の中でそれをするようになるのでございます。²³⁾

もと子はこのように、良質な文学作品や伝記を読むことを通じて学園の中だけでは経験できない多様な人々の暮らしや生き方に触れさせ、様々な境遇にある人のことを想像する力、様々な角度から人間の心の問題を考える力を育てようとしたのであった。

ここまで、学園での生活の基礎となる「家族」とその働きを表す「実際科」、学生の自治組織である学生委員会と学校行事、学園での生活で生じた問題について話し合う「懇談」、そして多様な人々の生き方を学ぶ「読書」の時間について述べてきた。「懇談」に代表される「自労自活」の生活と「読書」による学びに共通するのは、社会とのつながりが重視されていたことである。しかし、もと子は学園の外の社会との関係だけを重視していたのではなく、本稿の冒頭にも述べたように「学校の中もまた一つの社会」と捉えていた。もと子が自由学園において想定していた社会とは、どのようなものなのか。次節ではこの点について考察する。

2. 自由学園における社会

本節では、もと子における社会の意味を、自由学園での実践との関連において考察する。

2-1. 自由学園という一つの社会

先述したように、もと子は「学校の中もまた一つの社会」と捉え、各自が自己の生活を営みつつ仲間とともに自由学園という社会をつくり上げていくことそのものが「対社会の教育、および社会道徳の訓練」になるとの考えを持っていた。それでは、もと子が生徒たちにみずからつくることを求めている社会とは、どのようなものなのか。もと子はこのことについて、次のように述べている。

学園ではまず各学年三十幾人の一組を六家族に分けています。その六家族が集まって級をなし、その級が集まって、学園という一つの社会を形成しているのです。そうしてその家族の単位はいうまでもなく各個人です。²⁴⁾

ここからは、〈個人-「家族」-クラス-自由学園〉という図式が読み取れる。個人が集まって「家族」をなし、「家族」が集まってクラスをなし、クラスが集まって自由学園という社会を形成する。ここからわかるのは、自由学園における「家族」が生徒たちの経験する最初の（最小の）社会として想定されていたことである。それでは、もと子が「家族」での生活によって意図していたこととは何か。もと子は次のように続ける。

各々の子供は、各自に性格を持ち、長所を持ち欠点を持っています。それが五、六人で一と家族になっているのですから、お互いに自他の性格を尊重し、活発な人が内気な人を無視したり、内気な人が活発な人を恐れる気持ちになったり、学科の劣る人が自分を卑下したりしないで、家族はいつでも対等の気持ちの上に立って、長短相補って助け合うように、人を多く助けることが出来る人も、人から多く助けられる人も、ただただめいめい自分の出来る限りの真実と努力をもって、自分の家族に対していれば、その価値は同じものである。²⁵⁾

ここには、もと子の「家族」観の三つの要点が示されている。「家族」を構成する個人はそれぞれに性格も能力も異なる人間であること、「長短相補って助け合う」ことが「家族」の目的であること、その上ですべての人が「対等」で「その価値は同じ」であることである。言い換えれば、助け合う努力をするならば、その成果にかかわらずすべての人が等しく受け入れられるのが「家族」という場なのである。それぞれに異なる個人が集まって小さな社会を形成し、そうした小さな社会が集まり助け合って学校という一つの社会を形成する。そうした経験を積み重ねていくことによって、「本当の意味で自分を愛し友を愛し、学校を愛し、……お互いに本気で生きてゆこう助け合ってゆこうという心」が生まれるのだと、もと子は述べている²⁶⁾。

2-2. 助け合いによって進歩する社会

以上のように、もと子は社会を、それぞれに異なる個人が集まって形成しているもの、互に持てる力を発揮し補い合いながら生活する場であると捉えていたのだが、こうした考えの先には、社会は進歩するもの、進歩させていくべきものであるという考えがあった。

先ほどと同じ論文の中で、もと子は「社会」と「世間」の区別について論じながら次のように述べている。多くの人は、和服よりも洋服の方が機能的で経済的にもよいことを知っていながら、目立って世間に批判されるのを恐れて自分の娘に和服を着せている。しかし、「個人のために本当に都合のよいことは、社会のためにもよいこと」で、「社会というわれわれの集団の実体は、少しでもよいこと合理的なことの行なわれるのを待ち望んで」いるのであるから、よいと思うことは人の意見に流されず実行すべきである²⁷⁾。このように述べた上で、もと子は次のように述べている。

私たちの本気でする少しでも善いことは、身のためになるばかりでなく、社会のためにもなることなのですから、見せびらかしたり鼻にかけたりしないで、心から熱心に善いと思うことを実行していれば、はじめは世間から冷たく見られるようでも、いつの間にか社会から恵まれるようになって来るものです。また人に先立って事をするのには、何かにつけ

て身を慎まなくてはならないことを感じて、自然に人柄も高まってゆくものだと思います。自分の家の子供らでも、学校の子供たちでも、よい人になりたいと思うなら、世間を恐れずに進んで大小のよいと思うことを実行させてゆくことが第一です。²⁸⁾

ここからわかるのは、もと子が「私たちの本気でする少しでも善いこと」が社会の進歩につながると考えていたこと、そして、そのために「世間を恐れずに進んで大小のよいと思うことを実行」できるような人を育てることを教育の目的と考えていたことである。

このように、もと子は各自がよいと判断したことを積極的に実行し社会に影響を及ぼしていくことを求めていたのであるが、ここで注目したいのが、よいことを実行するためには「信仰」が必要であると述べていることである。同じ論文の中で、もと子は次のように述べている。

度胸のない——私はそれを信仰のないといいたいのです——が、親と、度胸のない学校で育つ子供が多いので、結婚しても世の中に出て仕事をしても、姑しゅうとめが何とこじょうといった小姑がどうしたと、始終よくよ世間を気にしたり、仲間の中によくない風儀があれば、その悪いことはわかっていても、仲間はずれにされるのをおそれて、進んでその中の一人になったりする人が、世の中に多くなるのです。そうしてわれわれの本当の社会が悪くなってゆくのです。²⁹⁾

もと子はここで、よいと思うことを他人の意見に流されずに実行する「度胸」を「信仰」と言い換えている。各人のよいと判断したことを実行するためには、他人の意見に流されないだけの強い意志が必要で、それは「信仰」に支えられたものであると、もと子は考えていたのである。

しかし、信仰とは個人の内面に深くかかわる問題であり、生活という現実的な問題とは離れたところにあるようにも思える。生活と信仰とは、どのようにかかわっているのだろうか。

2-3. 自由学園の礼拝

上に述べたことと関連して、ここでは自由学園の礼拝について取り上げたい。はじめに述べたように、自由学園の教育の背景にはもと子のキリスト教思想があるが、自由学園を創立する際、もと子は礼拝堂をつくらなかった。その理由は、もと子自身が「宗教の詰め込みほど有害な詰め込みはない」³⁰⁾と考えていたことによる。先行研究として挙げた村上も、もと子がキリスト教に関して「系統的な指導を避けており、その展開を析出することは困難である」と述べている³¹⁾。しかし、一方で「教育と宗教は二つ別々のものでなく、全く一つのもの」³²⁾と考えるもと子にとって、生徒とともに宗教について考える時間はなくてはならないものだった。それが徐々に形になっていったのが、自由学園の礼拝であった。

卒業生の記録によれば、「入学式の翌日からは一列に並んで、ミセス羽仁、ミスタ羽仁と握手することから一日が始まった」。「一人ひとりの顔を見て」、体調を心配したり困ったことはないかなど一人ずつ声を掛けられ、そうしたやり取りの中から「だんだんに途中で起こったいさかいの話になったり、誰さんの困った問題になり、それをどうすればよいかという話にも」なっていった。また、生徒たちの生活に即して少しずつ「聖書にあるお話も出るようになった」。創立2年目には、朝の集まりはホールで行われ讃美歌が歌われるようになり、さらにその翌年には、もと子と吉一による聖書に関する講話が行われるようになったという³³⁾。

村上のまとめによれば、朝の集まりは「おおむね1923年頃からは『礼拝』として定着していった」。「始業前の8時前後から全校生徒（本科、高等科）がホール（のちに講堂）に集まり、賛美歌を歌い、聖書を読み、祈り、羽仁夫妻の講話や生徒たちの所感が共有される集会的なもの」であった³⁴⁾。

自由学園の礼拝が行われるようになった経緯を、もと子は次のように振り返っている。

[創立当初は礼拝を持ち得なかったが、]しかし私は毎日彼等と共に生活する間に、特に前にいった懇談の時間に、思想問題についても、個人の生活についても、自然にキリストによる思いを語っています。そうしてそれは子供たちが、その家庭や小学校で得て来ている常識や、聞いて来た道徳と全然違う所がありま

す。いつでも彼等の熱心な問題はそこから出ました。……多くの子供たちがこのようにして遂にキリストを発見しました。しかし彼等がこの学校の先生はキリストのみであることを認め、かつそのことを何よりも喜び誇り得る今日の状態になるまでには、お互いにさまざまな戦いを経験しました。³⁵⁾

ここには、生徒たちと日々の生活について話し合う時間を重ねていく中で、もと子が「キリストによる思い」を語り、それが生徒たちの「熱心な問題」となっていく、「さまざまな戦い」を経て今日の礼拝の形になったことが説明されている。もと子が生徒たちの生活に即して聖書に関する話をするうちに、段々と生徒たちが関心を持つようになっていった様子がうかがえる³⁶⁾。

また、もと子は後に、自由学園の礼拝について次のように述べている。

学園では毎朝心をこめて礼拝をしています。それが人間道の根本です。それなしに生命のある団体が出来ないのです。おとなも子供も父なる神の前に一つになって、各自の使命を生きることの光栄を思い、天よりのみ給わり得る助けを祈り求めます。……弱い私たちは、一日の中でも知らずしらず浅い心の動きに生きて、多くの不甲斐ないことやすまないことばかりしています。しかし神は見捨てずに助けて下さることを信ずるゆえに、あすもまた集まって祈ります。³⁷⁾

「生命のある団体」とは、端的に、自由学園という社会が日々進歩するもの、進歩すべきものであることを意味している。自由学園を日々進歩する生きた社会とするためには、皆と一緒に祈ること、つまり礼拝が必要であると、もと子は考えていたのであった。

以上のように、もと子は生徒たちの生活に即して「キリストによる思い」を語り、ともにその問題について考える中から生徒が信仰へと導かれることを望んだのであるが、しかし、なぜ社会を進歩させるために神を問題にしなければならないのだろうか。次節ではこの点について検討する。

3. 羽仁もと子の教育における宗教

本節では、もと子における教育と宗教の関係を、自由学園の道德教育との関連において検討する。

3-1. 自由学園における宗教教育の方針

自由学園の創立に際して、もと子はキリスト教の精神を基盤とすることを表明する一方³⁸⁾、宗教の詰め込みは危険であるとして、直接的なキリスト教教育を行うことには慎重であった。それでは、どうすればよいか。もと子は創立の趣旨をまとめた論文の中で、自由学園の宗教教育の方針について次のように述べている。

倫理といたらよいでしょうか、修身といたらよいでしょうか、私たちの心の問題を取扱う時間を二つに分けて、一つは所謂実践倫理風に、一つは、古くからの人類の生活に現われて来た宗教心や、人生観や、著しい信念や、有名な宗教や、その教祖の話などを、それぞれ適当な方において、よき分類と系統の中に話して頂くことによって、そうして更に自由学園は、それらのいろいろの知識と努力をとり入れて、あたたかく醇化して行く力を持つことによって、子供たちめいめいの心々に自由な健全な宗教心の素地を養い成して行きたいと思えます。³⁹⁾

ここには、自由学園の宗教教育を大きく分けて二つの方法で行うことが示されている。一つは「実践倫理」、つまり生徒が各自の生活を営むこと、もう一つは「古くからの人類の生活に現れて来た宗教心や、人生観や、著しい信念や、有名な宗教や、その教祖の話など」を専門家に教わることである。第一節の内容と照らし合わせれば、前者が「自労自活」の生活、後者が「読書」にそれぞれ当たるだろう。この二つを通して「私たちの心の問題」と向き合い、「子供たちめいめいの心々に自由な健全な宗教心の素地を」養いたいと、もと子は述べている。

3-2. 理想を追い求める意志とそれを支える「宗教心」

前項で述べたように、もと子は実際の生活を営むことと哲学や宗教などについて学ぶことによって、

生徒各自の「宗教心」を養おうと考えた。しかし、もと子のいう「宗教心」とは何か。このことについて、もと子は次のように述べている。

家事や作法が役に立たないくらいに、修身も実際子供の心にふれていないといわれるのはなぜでしょうか。実生活について指導してゆかないからです。どこの学校でも、よいことをした子供があれば、先生はそれをほめ、それを例にして他の子供を教えるでしょう。また悪いことがあれば、日ごろの教えに照らして全体を戒めるでしょう。しかしそれでは足りません。学校の導きによって、子供たち自身の心の中から、よいことがだんだんに生まれ出て、それが子供のよい体験になり自覚になり、悪いことの出る道が、やはり自覚によってだんだん塞がれて来るのでなければなりません。そしてその大切な学校の導きというのは、修身の講話や教科書でなく、学校それ自身の誠意と人格によって指導される、子供たちの日々の生活から、自然にわからせられ、また動かされて来る、その導きの力でなくてはなりません。⁴⁰⁾

ここには、もと子の考える道徳教育（修身教育）のあり方が示されている。もと子によれば、道徳教育の目的は「子供たち自身の心の中から、よいことがだんだんに生まれ出て、それが子供のよい体験になり自覚になり、悪いことの出る道が、やはり自覚によってだんだん塞がれて来る」ようになることにある。そのためには、ある場面を取り出してよい・悪いと褒めたり叱ったりするだけでなく、子どもがみずからの生活を送る中で、試行錯誤しながらよい・悪いの判断を積み重ねていくようにしなければならない。そうした積み重ねによって、結果としてよいことをしようという気持ちが生まれ、逆に悪いことはしないというふうになっていく、というのである。

上の引用に続けて、もと子は次のように述べている。「何でも自分できるように」と教えている学校が、女中や小使にお茶淹れや掃除をさせている。「助け合うこと的美徳」を教えながら、教室は競争の場になっている。こうした学校には「学校それ自身に修身がない」のである。「私たちの実際は、遠く理想におよび得ないでも、あらん限りの力をもって、

理想に向かって進みつつあること、それが私たちのまことの生活、また修身の道」である⁴¹⁾。

しかし、理想を実現することは口で言うほど簡単なことではない。うまくいかないこと、失敗することはたくさんある。それでも、「子供たちに、よいことは、多くの忍耐と戦いを経て成就するものであることを経験させなくては」ならない⁴²⁾。そうした困難を乗り越える力を支えるのが「宗教心」であると、もと子はいう。もと子は自由学園での経験を基に自身の教育論をまとめた論文（第6回世界新教育会議での講演）の中で次のように述べている。

人間の心の底に明かに存在する宗教心を取り上げて、よい発達をさせないならば、その放置された人間の宗教心は、第一に最も多く迷信に囚われてゆきます。他の人々は眼前の享楽に落ちて行きます。そして幸い[に]してその何れにも囚われない人々は健全な人でしょうか。私は強く否と答えざるを得ません。なぜなら、宗教なしには——即ち神を対象として生きることなしには、人間の心は決して完全に強く燃え得るものではありません。互に不完全にして利己的な人間と社会を対象として生きている間に、人間の心が知らず知らず冷えてゆきます。私は現代の世相を省みて、大いなる迷信の世界を悲しみ、大いなる享楽の世界を悲しみ、更に多くの知識力量を持った人々の、その燃えざる心を悲しみます。⁴³⁾

ここに、もと子が「宗教心」の教育を重視する理由の一つが示されている。「宗教心」の教育が重要なのは、「宗教なしには——すなわち神を対象として生きることなしには、人間の心は決して完全に強く燃え得るものではないからである。

もと子は上の引用の中で、宗教を「神を対象として生きること」と言い換えている。もと子によれば、人は日々、他人と比較しながら生きている。他人が持っているものを欲しがったり、周りの人と同じような格好をするのが無難だと考えたりしてしまう。しかし、そうしているうちに「迷信に囚われ」たり、「眼前の享楽に落ちて」しまったり、また無気力に陥ってしまったりする。こうした状態に陥らないためには、「神を対象として生きること」、つまり周りの意見に流されず、自分自身のよいと思うこと、自

分自身の求めるものを追求していくことが必要になる。誰に何と言われようと自分の信じた道を行く、そうした強い意志は、他者との比較競争を超えたところにある価値を基準とすることによってしか生まれないと、もと子は述べているのである。

3-3. 自他の尊重と他者との協力

前項でみたように、もと子にとって「宗教心」とは、他人の意見に流されず、よいと思うことを実行する強い意志を支えるものであった。しかし、もと子のいう「宗教心」が可能にするのはそれだけではない。先ほど、もと子にとって修身とは理想を求めて行動することだと述べたが、理想を追求する上で必要になるのが他者との協力である。

女中や小使を置かず何でも自分たちでする自由学園の生活は、ただ楽しいことばかりではない。失敗したり、互いの考え方や能力の違いから衝突が起こることも多々あるからである。食事当番も掃除当番も、皆が決まりを守らなければ学園での生活は成り立たない。そのため、気の合わない人とも協力することが求められる。もと子は、人は往々にして気の合う人とだけ付き合いたいと思ってしまうが、「学校はそういう心に打ち勝って、どんな性質の違った人をでも友として、ついに理解と同情とに到るべき鍛錬の道場」⁴⁴⁾であると述べる。

第二節で述べたように、もと子は自由学園の「家族」をつくる目的を、各人の違いを尊重した上で対等な関係を築くこと、それぞれに助け合うこととしていた。しかし現実には、相手の欠点が目につけばそれを責め、他人よりも劣っていると思えば自分を卑下してしまう。こうした人間同士の関係から抜け出すために、神という人間を超えたものを基準とする必要があるのである。「どうしてもこの生命を完うしたい、ぜひとも人を愛しつづけましょうという意志と決心は、私たちの生命の父である神の愛を感じ、その力を信ずることからでなければ出て来ない」⁴⁵⁾。それぞれに欠点はあっても、不完全であるという点では皆平等である。様々な違いはあっても、それは各々の特色を発揮して皆で協力して一つの社会をつくり上げ、進歩させるためである。このことを学ぶために自由学園の日々の生活はあり、もと子のいう「宗教心」が、そうした生活の中で理想を追求することや仲間と協力することを支えていたのであった。

おわりに

本稿では、自由学園における道德教育を社会との結び付きという観点から捉え、その内容と背景にある羽仁もと子の思想について検討してきた。もと子は仲間と協力し実際の社会とかかわりながら各自の生活を営む「自労自活」の生活と、多様な人々の生き方や価値観に触れる「読書」の時間を通して、生徒一人ひとりの「宗教心」を養うことを試みた。もと子は生活という目の前の現実即した学びを重視する一方で、「宗教心」という目に見えない心の問題を生徒たちとともに考える時間を大切にしながら、「宗教心」とは、他者との協力によって社会を進歩させていくために不可欠なものなのであった。

以上のような自由学園における道德教育の実践は、生徒の主体的かつ協同的な行動を引き出すという点で、現代の道德教育に対して一つのモデルを提示している。もと子は教師による押し付けを何よりも嫌い、生徒がみずから学ぶこと、みずから課題を発見し、生徒同士の話し合いによって解決策を模索することを求めた。「自労自活」の生活そのものが「対社会の教育、および社会道德の訓練」になるという考えは、道德教育をただ徳目を暗記するだけの時間ではなく、みずから考え行動し、他者とともに社会を創造していく人間を育てるものとなるために重要な視点であるだろう。

他方で、もと子の思想にはいくつかの疑問点があることも確認しておきたい。一つは、「家族」と学校と社会を一直線上にあるものと捉えることの問題である。本論で述べたように、もと子は自由学園において〈個人－「家族」－クラス－自由学園〉という図式を描いていたが、この図式はさらに、「われわれの住んでいる市や町村や国」、ひいては「全人類」にまで拡大される⁴⁶⁾。しかし、現実の国家や国際社会の状況を見渡すまでもなく、それほど単純な関係にある訳ではない。戦時下における家族国家観との関係も含め、検討していくことが必要となる。

もう一つの疑問は、もと子における宗教観である。もと子はキリスト教という特定の宗教を詰め込むことは危険だとし、すべての人の心の奥にある「宗教心」を育てることを教育の目的としたが、他方で、自由学園はキリストを唯一の教師とするとも述べていた⁴⁷⁾。キリスト教という特定の宗教を教育の基礎とすることが本当に普遍的なことであるの

か、慎重に検討しなければならない。

最後に、大正新教育における自由学園の位置付けを明らかにすることも今後の課題の一つである。例えば、先行研究で挙げられている岩瀬六郎の「生活修身」⁴⁸⁾などの考え方には、もと子とも重なる部分がある。これらの実践とも比較しながら、自由学園の実践が持つ意味を追究していきたい。

注

引用に際しては、旧字体を新字体に、旧仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。なお、引用文中での [] で括られた部分は筆者による補足である。

- 1) 貝塚茂樹 (2020b) 『新時代の道徳教育——「考え、議論する」ための15章——』ミネルヴァ書房、24頁。
- 2) 「『自由学園』の創立—私共同志の新事業に御賛成を願います—」『婦人之友』1921年2月号、2-12頁。
- 3) 「家庭教育より学校教育を見る」『羽仁もと子著作集 第十一巻 家庭教育篇 (下)』(新版、2010年、初出は1928年7月)、273頁。
- 4) 貝塚茂樹 (2020a) 『戦後日本と道徳教育：教科化・教育勅語・愛国心』ミネルヴァ書房、166-167頁。
- 5) 前掲、貝塚2020b、江島顕一 (2016) 『日本道徳教育の歴史：近代から現代まで』ミネルヴァ書房。
- 6) 中野光 (1968) 『大正自由教育の研究』黎明書房、239頁。
- 7) 村上民 (2020a) 「自由学園草創期におけるキリスト教と「自由」問題 (1) 松岡もと子、羽仁吉一の青年時代とキリスト教との出会い」『生活大学研究』5巻1号、22-35頁。
- 8) 村上民 (2020b) 「自由学園草創期におけるキリスト教と「自由」問題 (2) 羽仁もと子、吉一の出版事業とキリスト教との関わり」『生活大学研究』5巻1号、36-60頁。
- 9) 村上民 (2020c) 「自由学園草創期におけるキリスト教と「自由」問題 (3) 羽仁夫妻の「信仰の事業」としての自由学園創立とそのキリスト教」『生活大学研究』5巻1号、61-85頁。
- 10) 前掲、村上2020c、75頁。
- 11) 「それ自身一つの社会として生き成長しそうして働きかけつつある学校」『婦人之友』1932年10月号、36頁。
- 12) 前掲、「『自由学園』の創立—私共同志の新事業に御賛成を願います—」、4-5頁。
- 13) 同上論文、5頁。
- 14) 同上論文、6頁。
- 15) 自由学園一〇〇年史編纂委員会 (2021) 『自由学園一〇〇年史』婦人之友社、256頁。
- 16) 「音楽」『学園新聞』13号 (1931年4月13日)、「音楽会によって十周年記念の第一声を挙ぐ」『学園新聞』16号 (1931年5月4日)。
- 17) 前掲、「家庭教育より学校教育を見る」、270-271頁。
- 18) 同上論文、272-273頁。
- 19) 自由学園女子部卒業生会編 (1985) 『自由学園の歴史 I 雑司ヶ谷時代』婦人之友社、56頁。
- 20) 同上書、56-57頁。
- 21) 前掲、「家庭教育より学校教育を見る」、311-312頁。
- 22) 同上論文、311頁。
- 23) 同上論文、311-312頁。
- 24) 同上論文、273頁。
- 25) 同上論文、273-274頁。
- 26) 同上論文、274-275頁。
- 27) 同上論文、283頁。
- 28) 同上論文、284-285頁。
- 29) 同上論文、287頁。
- 30) 同上論文、315頁。
- 31) 前掲、村上2020c、63頁。
- 32) 「教育の目的は何ぞ」『婦人之友』1947年10月号、4頁。
- 33) 『自由学人 羽仁吉一』編集委員会 (2006) 『自由学人 羽仁吉一』婦人之友社、91-92頁。
- 34) 前掲、村上2020c、65頁。
- 35) 前掲、「それ自身一つの社会として生き成長しそうして働きかけつつある学校」、44頁。
- 36) 以上に述べた礼拝や自由学園の宗教教育のあり方については、創立以前から植村正久に助言を仰いでいたことが、村上の研究でも指摘されている (前掲、村上2020c)。なお、村上は、礼拝を行うことが「各々の魂の自由な成長に沿って受け入れられていくよう、各々の内発性に細心の注意が払われて」いたことを指摘している (前掲、村上2020c、65頁)。先ほどの生徒の記録にも「両先生は『礼拝の形を押し付けてはならない』と非常に配慮しておられた」(前掲、『自由学人 羽仁吉一』編集委員会2006、92頁)とあり、もと子が礼拝という形式やそこで行われることはあくまで各人の自由な意志によって選取られるべきものであると考え、それを生徒たちにも伝えていた様子がうかがえる。
- 37) 前掲、「家庭教育より学校教育を見る」、313頁。
- 38) もと子は自由学園の開校式において、「自由学園に先生はありません。大人も子供も皆お互いの長所を学びましょう。唯一人ここに変わることはない先生があります。それ

はキリストです」と述べている（前掲、「それ自身一つの社会として生き成長しそうして働きかけつつある学校」、43頁）。なお、この言葉は『マタイによる福音書』23章10節の「あなたがたは教師と呼ばれてはならない。あなたがたの教師はただひとり、すなわち、キリストである」に由来するものと考えられるが、この点についてはさらなる検討が必要である。

- 39) 前掲、「『自由学園』の創立一私共同志の新事業に御賛成を願います―」、10頁。
- 40) 前掲、「家庭教育より学校教育を見る」、305-306頁。
- 41) 同上論文、306-307頁。
- 42) 同上論文、307頁。
- 43) 前掲、「それ自身一つの社会として生き成長しそうして働きかけつつある学校」、45頁。
- 44) 前掲、「家庭教育より学校教育を見る」、309頁。
- 45) 同上論文、312頁。
- 46) 同上論文、274-275頁。
- 47) 注38を参照。
- 48) 前掲、江島2016、103-104頁。

本研究は、上廣倫理財団令和元年度・令和2年度の研究助成を受けたものです。